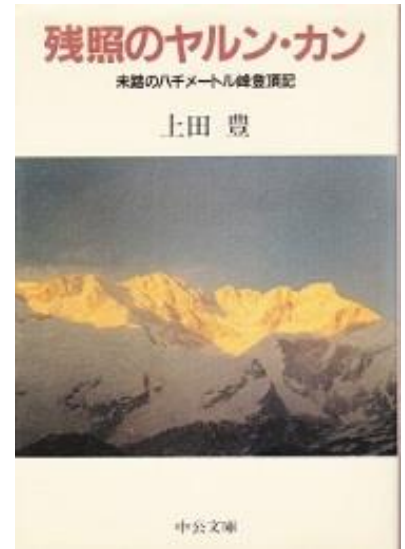


上田 豊著『残照のヤルン・カン』

ヤルン・カンという山は、標高は 8500m もありながら、カンチェンジュンガ峰 8600m のジャンダルム（西峰）と見做されてヒマラヤ・ジャイアンツ 14 座（ヒマラヤで標高 8000m 超の山々、Eight-Thousander ともいう）に入っていないばかりでなく、普通の地形図にはその山名さえも記載されていないという不遇の高峰である。

その位置は、ネパールの国境東端のインド・シッキムとの国境にあり、我々一般登山者はせいぜいクーンブ・ヒマールの東端、イムジャ・ツェ峰辺りまで入るのが関の山だからこの山を望遠する機会も無く、従がってなじみも薄い、この本によると、この山は山頂から一気に高度差 1500m のバットレスを落していて、主峰カンチェンジュンガよりも堂々としているのだそう（右の書影で左から 2 番目の山がヤルン・カンでその右の奥に小さく見える山がカンチェンジュンガ主峰である）。



この山は、ヒマラヤ初登頂競争時代が既に終了し、ヒマラヤ・ジャイアンツ 14 座も既に全て登頂された 10 年後の 1973 年に、京都大学学士山岳会遠征隊によって初登頂された。京都大学には今西錦司以来の伝統“遠征に行くなら未踏峰を”があつて、当時残されていた世界最高の未踏峰であるこのヤルン・カンに遠征の的が絞られたのだそう。

さて、前置きが長くなった。この本は、その登攀隊員として山頂を極めたもの、困難な下山途中で遭難、ザイル・パートナーを失い、自身も幻覚に苛まれながら生と死の間を彷徨って奇跡的に生還した著者の私的登頂記であり、遭難死寸前の極限状態を描いたドラマでもある。この時の状況は、余人の想像をはるかに絶する壮絶な状態に陥っていたと思われるが、著者の筆致は淡々としてむしろさわやかである。しかしまた、その裏では、下山時に遭難して行方不明になったままのザイルパートナー、遠征後ほどなく遭難事故などで亡くなった隊員への鎮魂も含めて、この遠征隊で同じ釜の飯を喰った 15 隊員全員への感謝の念が行間に滲み出ていて、涙が出てくるのを禁じ得ない。

著者は、この時の遭難で両足の指全部と右手指 4 本を失ったが、以降も雪氷学者としてヒマラヤの氷河調査や南極の氷床調査を行った雪氷学・氷河学の泰斗である。南極観測には最後は観測隊長としてに都合 3 回参加、地球の気候変動研究の貴重な試料である南極の氷床研究に尽力された。

南極の調査では、最低気温氷点下 60 度の内陸に 5 ケ月間冬籠りし、更に 700km 先の南極で 2 番目に標高が高い未踏の南極ドームで数百回のボーリングを繰り返し、深さ 200m の氷柱を掘削した。この時の 13 ケ月に及ぶ内陸雪原 4000km の探査行の様子は、『未踏の南極ドームを探る』（成山堂書店「極地研ライブラリー」2011 年刊）に詳しい。快適で設備が揃った昭和基地ではなく、前進基地の建設やろくな居住設備も無い内陸部での過酷な自然との闘い、しかも「極地での単調な長期に亘る」ある意味では平凡な日常を淡々と綴ったものであるが、その人間模様など飽かず読ませる。極地ならではのロマンとドラマのなせる技であろうか。この時著者が越冬したのは既に四半世紀も前のことで、これらの記録をいつかは世に問いたいと願い続けてきたが仕事に追われて、やっと出版できたのは定年退官後の昨年末のことであったそう。四半世紀も前のことを克明に再現した緻密な記録、記憶力と雪氷研究にかけた情熱には脱帽せざるをえない。

かつて、著者の講演会「ヒマラヤ氷河の変遷」を聞く機会があつたが、淡々とした語り口のなかにも老いてなおヒマラヤ登山への情熱と氷河研究への熱意が伝わってきた講演であつた。

『残照のヤルン・カン』 中公新書 1979 年刊、中公文庫 1991 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)